2020.07.16

松沢哲郎のこと(3)

小嶋祥三

チンパンジーがヒトに近いという主張の当然の帰結として、松沢は動物福祉、さらに動物の権利の方向に興味を持っていたように思う。研究所のチンパンジーの飼育環境の改善などに取り組んでいた。彼は日本におけるチンパンジーの飼育の実態の調査を行っていた。これが動物園など展示施設とのつながり、熊本のチンパンジーの施設の建設に結びついたものと推測している。わたしはチンパンジーの飼育環境がよくなることには賛成で、肯定的に見ていたが、今回の研究費の不正使用につながったのは、残念だった。

松沢が研究所に行った最大の変更は、フィールド関係の研究施設を廃止し、京都に「野生動物研究センター」をつくったことだろう。この時、わたしは研究所を退職していたので、どのような学問的必然性があったのか、分からない。霊長研のフィールド研究者がどう考えたか知らないが、出来上がったものが、彼らの希望したものだったろうか。

野生動物研究センターは、松沢が専ら自分の主導で運営できる施設のように、わたしには思われた。また、松沢の京都における活動拠点になっただろう。センターの教員には、学士山岳会の会員がいた。そして、熊本の類人猿の施設は、このセンターに属することになった。看板には「野生」とあるが、センターの活動は動物の展示施設との結びつきが強くなったように見える。センターの教員に動物園関係者がいた。また、教員を動物園に異動させていた。その教員が異動を拒否することは難しかっただろうと推測する。

詳しいことは知らないが、松沢は熊本のチンパンジーを引き受けることで、巨額の資金を得たと聞いた。それが、彼の金銭感覚を狂わせたのだろうか。犬山の霊長研にはOBがいて、それなりのチェックが入るだろうが、京都の野生センターでは、松沢は思うがまま力をふるえたのではなかろうか。逆に言うと、チェックが弱くなり、それが、彼特有の全能感とともに、今回の遵法意識の欠落、研究費の不正使用の下地になったように思う。

松沢は強い自負心、全能感（時には、傲慢な印象を与えてしまう）を持っていたように思うが、非常に優秀な人間でも、それを表に出さない人はいくらでもいる。やはり松沢の特徴なのだろう。こんなことがあった。霊長研ではエレベータ・ホールと廊下は透明なガラスのドアで仕切られていた。ある時、わたしは室伏靖子先生（わたしと松沢の共通の上司である）と鉢合わせになった。わたしは身を引き、室伏先生はドアを開け、申し訳なさそうに小さく会釈をして、わたしの前を通り過ぎた。松沢が室伏先生と同じ状況になった時、松沢は室伏先生を待たせて、自分が先に通っていった。無論、これはとるに足りないエピソードだろうし、松沢もぼんやりとしていたのかもしれない。しかし、わたしが今回の研究費の件を聞いた時、真っ先に思い浮かべたのはこの光景だった。

2020.07.16

わたしも松沢も、室伏先生のもとで、自由に研究をさせてもらった。わたしたちが室伏先生と同じ立場に立ったなら、同じように院生や若手研究者に接したい、と松沢と話し合った記憶がある。わたしはそうしたつもりだが、松沢は若手をポストと研究費でコントロールし、強圧的に接しているようにみえた。わたしは松沢が若手に向かって、「役立たず」とか「顔も見たくない」といったのを聞いたことがある。室伏先生には、とても考えられないことだ。松沢は室伏先生を尊敬しているように振舞っている。そうであるならば、室伏先生と同じように行動すればよかったのにと思う。松沢は現在も霊長研に籍を持っており、研究所の運営に影響力を維持していたようにみえた。室伏先生は、退職してから犬山の研究所に来たことはなかったのではないだろうか。

熊本の施設も、熊本や霊長研の大きなケージも、松沢の主導で建設されたものと思う。今回の研究費の不正使用の件で、松沢の下で育った 3 人の研究者も一緒に処分を受けるが、彼らは松沢が描いた構想の中で動いていたのにすぎないと思う。わたしにはかれら三人が松沢の意向と異なる行動をとれるとは、到底思えなかった。不正の詳細を知らないので、詳しいことは分からないが、3 人が哀れに思えてくる。松沢は、まだ将来のある中堅、そして前途洋洋の若手の研究者を、結果として傷つけたことを、しっかりと考えるべきだ。

松沢は今後、どのようにふるまうかで、評価されるだろう。